

学校の概要（平成 15 年 4 月現在）

学校名	甲府市立城南中学校					
学 年	1 年	2 年	3 年	特殊学級	計	教員数
学級数	6	5	6	1	1 8	4 0
生徒数	2 0 1	1 8 1	2 0 9	1	5 9 2	

研究の概要

1．研究主題

自ら意欲的に学ぶ生徒の育成

- 意欲を喚起する効果的指導法の研究を通して -

2．研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

全学年・全教科

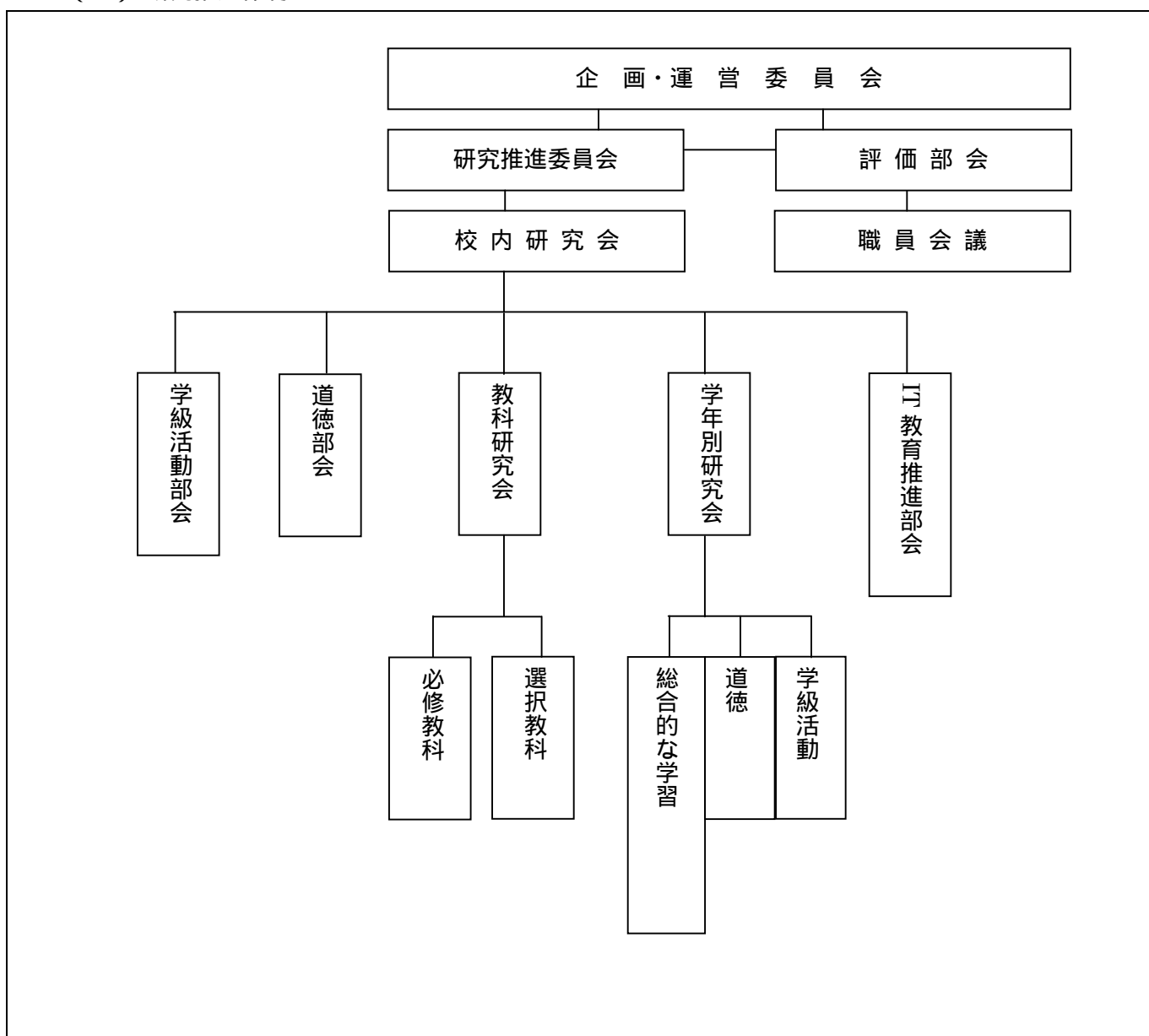
- ・ 3 年生数学
生徒の学力に大きな差ができていない教科・学年であるため（習熟度別クラス編成実施）
- ・ 3 年生英語
生徒の学力および学習方法に大きな差ができていない教科・学年であるため
（複数教師による T/T 実施）
- ・ 全教科，全学年
意欲を喚起する効果的指導法の研究が全体において必要であると考えているため

(2) 年次ごとの計画

平成 15 年度	<p>テーマ</p> <p>自ら意欲的に学ぶ生徒の育成</p> <p>- 意欲を喚起する効果的指導法の研究を通して -</p> <p>研究の見通し</p> <p>学力向上フロンティアスクールとしての研究の柱を立てること。</p> <p>現状の学習意欲を把握し，具体的な研究内容を設定すること，また研究の実践を始めること。</p> <p>研究内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現状の把握 「学習意欲に関する調査とその分析」 ・ 現状の把握 「実施状況調査とその分析」 ・ 習熟度別学習における学習効果の研究（数学） ・ T・T による学習効果の研究（英語） ・ 学習意欲に関する研究 ・ 具体的な授業観察および授業分析を通しての校内研究会実施
----------	--

平成16年度	<p>テーマ</p> <p>自ら意欲的に学ぶ生徒の育成</p> <p>- 意欲を喚起する効果的指導法の研究を通して -</p> <p>研究の見通し</p> <p>平成15年度に設定した研究の方向性を具体的に推進し、その効果を探るとともに、学校外に研究の成果と課題を発信する機会を設ける。</p> <p>研究内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 習熟度別学習における学習効果の研究（数学） ・ T・Tによる学習効果の研究（英語） ・ 学習意欲に関する研究 ・ 具体的な授業観察および授業分析を通しての校内研究会実施
--------	--

(3) 研究推進体制



1. 研究の成果

(1) 「意欲」に関する考え方が明確になってきたこと

1 月の校内研究会に山梨大学より進藤教授を講師にお願いし、いろいろとお話をいただいた。その中で「意欲」というものが一体どのようなものであるかについて大変参考となる示唆を受けた。例えば意欲(学習動機)には外発的動機と内発的動機と無動機があり、外発的動機(例えば学習をすれば何か報酬としてもらえる)はアンダーマイニング現象とって、内容のおもしろさよりも、学習行為そのものが報酬獲得の手段となってしまうので報酬がなくなったり、報酬をもらってしまうと学習動機も自然に消滅すること。感覚遮断状態とって無動機の生徒は、教師の働きかけや学習の行為に対してそのすべてを遮断してしまうので3年間学習を積み重ねてもほとんど何にも残らないで終わってしまうこと。いかに内発的な動機を高めることが大切であるかということ再認識した。

また、「達成動機 成就感」を得ていくプロセスをなるべく短い期間でまめに与えていくことで、「自分は有能である」ことを自覚していくことが大切であること。この自己有能感こそ、次のステップへのエネルギーであり「自分もやればできるんだ」というプラスの思考が、教科での学習により前向きに取り組ませるもとなったり、時には他の教科にもプラスに影響することもあると考えられる。こうした学習に対する意欲を意識した授業づくりは、私たち教師一人一人が常日頃意識することで、生徒達がわかる授業から自らわかろうとする授業への転換を図ろうとするのが私たちの研究の柱である。

(2) 「意欲」を高めることを意識した授業のありかたを考えるようになってきたこと

私たちは、意欲を高めるために授業の在り方を工夫して取り組んできた。各教科が「楽しくわかりやすく、学習者が積極的に取り組むことができる授業」を目指すことこそ、学力向上の「不易」なテーマであると確信している。しかしながら多忙さや教科以外の要素から、ついつい教科研究や教材研究がおろそかになってしまったり、生徒がどう理解しているかをフィードバックしないで授業を進めていったりしてしまいがちで、今回学力向上フロンティアを通して、一人一人の教師が今一度「よい授業づくり」に目を向けてきたことが大きな成果であったと考えている。指導と評価の一体化・よい授業とそれに伴う整合性のある評価の在り方など、まだまだ課題は多い。しかしながら、まずは本年度取り組んできた意欲を高める授業づくりを教師全員が意識したことで、次の課題が見えてきたと考えている。

(3) 互いの授業を観察しあい、授業研究を進めてきたこと

本年度、各教科で授業を公開してもらい本研究紀要に載せてもらった。授業を公開して校内研で検討することも4つの教科(数学・理科・音楽・英語)で行ってきた。こうした研究授業は、授業者だけでなく参観した先生方にも自分の授業を考える機会になるので、今後も定期的に続けていきたいと考えている。またその際に、意欲を高める10の項目を、共通理解の用紙として持参したことも「ただ参観する」から「視点を決めて参観する」につながり興味深い研究の取り組みとなった。

2. 今後の課題

習熟度別の学級編成授業（3年数学）複数教師による協働授業（3年英語）など具体的に形態を変えて教えている教科はそれなりに効果を上げてきているが、本当に限られた学年の限られた教科の実践でしかすぎない。学力向上フロンティア事業を受けた教師陣として、全職員がフロンティアティーチャーとしてこの機会を有効にとらえ、生徒達にその研究成果を還元していくことは決して簡単なことではない。現実の問題として生徒指導や部活動指導など教師のゆとりはほとんどない状態である。しかしながら学習意欲を高めるために、私たちが研修を積み、教科部会などの機会を設定し、お互いの授業を見合っ
て意見交換をするなどの努力をしていかななくてはならない。来年は公開も視野に入れて、大変な一年になるかとも思われるが、生徒に還元のできる研究がどうあるべきかを考えていきたい。

学力把握のための学校としての取組

現状の把握 「学習意欲に関する調査とその分析」全学年6月実施
調査の目的・・・学習の意欲がどこに起因しているかを調べるための調査
現状の把握 「実施状況調査とその分析」全学年7月実施 3教科
調査の目的・・・全国・山梨の学力意欲と学力水準と本校のものを比較分析するための資料
学力の把握「NRT（診断的学力検査）」1,2年4月実施 1年4教科 2年5教科
5教科の学力推移をみるための調査 個人と集団の学力推移を診断するための資料として活用

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

本年度は、フロンティアスクール初年度であったため、教員が学力向上についての共通意識を持ち、具体的な研究の柱をどこにするかを検討することが第1の目的であった。従って研究成果を普及するまでには至らず、むしろ研究を普及している先進校に学んだり、専門的な見地から学力についての講義を聴いたりして1年間研鑽を積んだつもりである。

来年度は、2年目ということもあり、現段階で秋に研究公開を予定している。

【新規校・継続校】	・・・・・・・・	14年度からの継続校
【学校規模】	・・・・・・・・	16学級以上
【指導体制】	・・・・・・・・	少人数指導とT/Tによる指導（1部教科）
【研究教科】	・・・・・・・・	全教科
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		無